

中
2025

国

語

始める前に左の注意事項を読みなさい。

- 始めの合図があるまで開いてはいけません。
- 問題は全部で26ページあります。
- 答えはすべて解答用紙に書きなさい。
- 始まりの合図で、解答用紙に受験番号、氏名を書きなさい。
- 質問のあるときは静かに手をあげ先生の指示を待ちなさい。
- 終わりの合図があったら、ただちに筆記用具を置きなさい。

(第2回)

一 次の【A】【B】それぞれの文章を読んで、後の問に答えなさい。なお、出題の都合で、表記を一部省略したところがある。

【A】

次の文章は、「周りからどう思われるか」を気にするあまり、生きづらさを感じる中学二年生の佐々木優希が、主人公の物語です。以下は、クラス委員の優希と荻野誠が司会となり、体育祭のスローガン決めをする、ロングホームルームの場面です。

五時間目のロングホームルームが始まった。

辛島先生は最初だけ教卓で、

「この時間は、前回から持ち越した、体育祭のスローガン決めをするので、荻野さんと佐々木さんに進行をお願いします」と話すと、^①オブザーバーに徹する^てように、教室の後ろのロッカーのところまで下がった。優希は誠を振り返って目を合わせると、同時に席を立って教卓に向かって歩いた。

両こぶしに力を込めると、優希は口火を切った。

「では、体育祭のスローガン決めを行いたいと思います。前回の話し合いでは『必勝』と『心ひとつに』という案が出ましたが、なにか新しいアイデアを考えてきてくれた人は、いますか？」

^②優希の問いかけに、クラスみんなは目をそらすように、机の上を見たり首をひねったりしている。

「だーかーらー」

流星の大声が響く。

「田中くん、発言は拳手願います」

優希がたしなめると、流星はだるそうに「は〜い」と手を挙げた。

「田中くん、お願いします」

誠は貝のように押し黙ったままで、ひとことも口を開かない。

「前のときも言ったけど、このふたつを合体させてさ、『心ひとつに必勝』でよくね？ さつき全員リレーの練習で一位になったの、超盛り上がったじゃん。心ひとつに優勝目指してさ、感動したわけじゃん」

流星が言うと、野球部員だけでなく、瞳子や他何人かが、小さくうなずいている。

でも、おおかたの生徒は反応がなく、賛成なのか反対なのか分からない。

「ちょっといい案、思いついちゃった」

優希がうながすと、流星が続けた。

「いや、スローガンのことじゃなくて、全員リレー。やっぱり足の遅いやつは、走りたくないやつもいるわけじゃん。

だから当日そのときだけ、そいつには急に体調不良になってもらって、代わりに俺が走っちゃうっていうのは、どうよ」

優希は開いた口が塞がらなかった。暗に誠のことを言っているのが、見え見えだった。斜め下を見ると、誠の握られたこぶしには、筋がくつきり浮いていた。

すると、あろうことか瞳子が、

「それ、案外いいかも」

ぼろりとつぶやいた。そのつぶやきを耳ざとくキャッチした流星は、

「だろ？ たまにはいいこと言うだろ？ 他に意見もないし、もう『心ひとつに必勝』で決まりでいいじゃん」

たたみかけるように言った。

優希は、④「透明なルール」の见えないロープに、クラス全体がうねうねとからめとられているような気がした。思わずつばを飲み込んだ。

「いや、まだ、意見が出るかも知れません」

優希がかかるうじて、流れにストップをかける。

「ちっ。俺ら野球部はさー。優勝しないと、早朝ランニングが待ってるんだよ。それだけは、マジ勘弁」
流星の小言に、

「それ、変だよ」

優希の口から、思わず本音がこぼれた。誠が横でハツとするのが分かった。

「はあ？」

流星はとたんに不機嫌な顔になって、

「変だろ何が何だろうが、部の伝統は、簡単には変えられないんだよ」

ぶっきらぼうに投げ返した。教室がざわつきたした。

優希は我に返り、

「ごめんなさい。みなさん、静かにしてください」

と、声を張り上げた。

「スローガンの話し合いを続けましょう。他に意見がある人はいませんか」
ざわついていた教室が、だんだん静かになった。

「意見が出ないようなので、わたしからも意見を言ってもいいですか」

何人がうなずいてくれた。

優希はつばを飲み込もうとしたが、口の中はからからで喉が引きつれた。そつと下を向いて、左の手のひらに目を落とした。ボールペンで書いた文字をあらためる。

よし、言うぞ。

『心ひとつに必勝』。たしかにそれは、体育祭はクラスで得点を競う面もあるから、みんなで優勝を目指すというのも、ありだと思えます」

⑤ここで区切った。流星や瞳子たちが、でしょ、というようにうなずいている。

「じゃあ、」

喉がむずがゆくなつて、咳が出てしまった。喉もとを手で押さえつけた。誠が上体を少し倒して、優希の横顔に視線を送った。

頑張れ、とエールを送ってくれている。

「でも、わたしのスローガンの案は、『勝つより楽しむ』です」

ひとまずここまで言うのと、うなじがカッと汗ばんだ。

「どういうこと？」

瞳子が⑥間髪を入れずに、尋ねた。

「わたしが考えたのは、全員リレー。勝ちを目指すのではなく、全員で楽しんじゃうというのはどうでしょうか。

三組のクラスカラーは黄色だから、黄色をモチーフにそれぞれ仮装して、楽しんで走るの、どうでしょう」

優希が一気に話し終えると、クラスがとたんに沸いた。

「え、なんか楽しそうじゃん」

「そういうのって、今までなかったよね」

「面白そうかも」

「はい」
どんよりしていた空気がいつぺんに浮上した。わいわいと軽やかな話し声が飛び交った。そんなとき、

瞳子があえて手を挙げた。優希の肩が緊張する。

「牧さん、どうぞ」

「それってルール違反にならないの？ ぶっちゃけ、そんなことしたら、北側先生に三組がにらまれちゃうよ。優希は、あ、佐々木さんは内申がいいから、気にしないのかも知れないけど」

瞳子の言葉は優希の心をひつかいた。内申がどうか、考えもしなかった。

あの瞳子が自分に対して、嫉妬めいた気持ちを持っていたなんて。

それでも、瞳子は瞳子で、素直な気持ちを隠さずにぶつけてくれる。ありがたいことだと思う。

『勝つより楽しむ』のアイデアでいったん浮上した空気が、幕が下りるみたいに沈んでいった。

「牧さん、意見ありがとうございます。他に意見はありませんか？」

沈黙が流れた。

優希はひとつ咳払いをしてから、口を開いた。

「椿中では、この春からブラック校則がなくなりました。だけど現状は、それほど変わっていません。それは、目に見えるルールが無くなっても、透明なルール、目に見えないルールに、わたしたちが縛られているからなんじゃないかと思いました」

「透明なルール？」

瞳子が⑦怪訝そうに眉をひそめた。

みんなの目がまっすぐ自分に注がれている。足を踏ん張っていないと、緊張で倒れそうだ。

「例えば、同調圧力。自由な髪型にして目立ちたくない、とか、先輩ににらまれるんじゃないか、とか……」
声が震えてしまう。

「あるある」

まじかがつぶやいた。

「あと、自分が自分に作ってしまう、透明なルール」

優希が続けると、

「何だよそれ」

流星がつつこんだ。

「こういう場でも、反対意見を言ったら、嫌われるんじゃないかって勝手に決めて、それなら黙っておこうって、何も言わない。でも本当は、反対意見を言ったら、嫌われたりしないのに」

優希の言葉に、うなづく人が何人かいた。たとえ数人であっても、心を強くしてくれた。

「わたしは、米倉さんが言ってみたみたいに、ここには三十五通りの心があって、それぞれ思っていることや、意見があると思うんです。だから——」

一度言葉が切れた。

「だからわたしは、どんな意見であつても、みんなで、自由に、言い合いたい」

教室が、静まりかえった。

優希には、自分の心臓の音しか聞こえなかった。こんなに激しく脈打っているのに、血が届いていかないのか、

指先は水みたいに冷たくなっていく。

しばらくして、

「はい」

楓^{かえで}が手を挙げた。

「庄司^{しょうじ}さん、お願いします」

優希^{ゆうき}の^⑧声^{こゑ}がうわずった。

「うちは、あ、わたしは、佐々木さんの仮装リレー案が、面白そうだなって思いました。正直、全員リレーで足引っ張っちゃったらどうしようって、不安でしょうがなかった。うちも、勝つことより楽しみたい」

楓は一気に言った。頬^{ほお}が少し紅潮^{こうしやう}している。

「はい」

手を挙げた男子が、

「僕も、優勝^{ねち}狙い^{ねら}いより、楽しむ方がいいとは思いますが、仮装まではやりたくない。応援^{おうえん}なら頑張るけど」

と言うと、誠^{まこと}が「同感」と小声でつぶやいた。

「はい。全員リレーじゃなくて、出たい人だけで走ればいいんじゃないですか？」

「はい。そんなことをしたら、他のクラスとフェアじゃなくなります」

「はい。他のクラスとも、仮装とかパフォーマンスで闘^{たたか}うとか」

「はい。今から種目を変えるなんて、出来るのでしょうか」

今までのロングホームルームではありえないくらい、次々と意見が続いた。

⑨ 冷たかった優希の指先が、じんじんしてきた。

突然前のドアがガラリと開いたのは、そのときだった。

一瞬で空気が固まった。教室の様子をのぞきにきたのか、北側先生が立ちはだかつていた。

「お前ら、仮装だとかなんだとか、体育祭をなんだと思ってる」

凄みのある声に、空気がビリッと震えた。

「外で頭を冷やしてこい。全員、グラウンド十周だ！」

北側先生は吠えてしまった。校長先生もかわって、目を光らせていた校則も減り、ずつとこらえていたものが、堰を切つてあふれ出すみたいに。

北側先生は、去年よく言っていた。

校則があるからこそ、お前ら生徒たちは、安心して学校生活を送れるんだぞ、と。

どのくらい前のことか分からないが、市内の中学校はひどく荒れていて、一部の不良グループが窓ガラスを割つたり、授業を妨害したりしていたらしい。

それを押さえつけ、厳しい校則で取り締まることで、学校を落ち着かせたという自負が、北側先生にはあるようだ。

「おい、早くしろ」

北側先生が追い打ちをかけた。

でも、誰も立ち上がらなかつた。流星たち野球部員でさえ、^⑩身を硬くしたまま、じつとしている。

「北側先生、それは体罰になります。そういう時代は、もう終わりました」

後方から透き通った声が飛んできた。

後ろからクラスを見守っていた辛島先生が、背筋をピンと張って歩み出てきた。

辛島先生は教壇きょうだんに上がると、優希や誠にいったん自分の席せきに戻るもどるようにながした。

辛島先生は、前のドアのところで仏頂面ぶつちやうづらをしている北側先生を一瞥いちべつすると、一度宙ちゆうを見て息を吐はいてから、正面せつめんのみんなを見据みえた。

「わたしは子どものころ、いじめられていたことがあります。それはなぜか？ 人と違ちがっていたからです」

辛島先生はそう切り出すと、突然、黒髪くろかみの※⁴ボブスタイルの髪かみの毛けをまさぐりだした。

生徒たちの眼差まなざしが、一寸のぶれもなくまっすぐに注つがれた。

辛島先生は髪かみの毛けをつかむと、一気に取り去った。手品てんぴんみたいに、くるくる巻まきの赤毛あかのカーリーヘアが現れた。

辛島先生のボブスタイルは、ウィッグだったのだ。

驚おどろきで教室きょうしつがどよめいた。優希は瞬まばたきを忘れた。

「みんな、びっくりしたでしょう？」

辛島先生は、微笑ほほえみさえ浮かべた。

「わたしは、母方のオーストラリア人の祖母そぼゆずりで、赤毛あかに生まれました。この髪かみの毛けのせいで、子どものころはいじめられたの。大きくなるにしたがつて、だんだんいじめはなくなっただけど、高校生のときにね、わざわざ

『地毛証明じげしやうめい』を提出ていしゅつさせられました」

「地毛証明？」

流星りゅうせいがつつこんだ。

「わたしが通とっていた高校は、髪染かみぞめめが禁止きんしだったの。だから、わたしの髪かみは染めたりしてなくて、もともとの地毛ぢけですってという証明。小さいころの写真しやしんまで添付てんぷさせられて」

「え、ひどい」

瞳子が口を挟む。

「それが悲しくて悔しくて、不登校になってしまった。でもね、わたしのことを救ってくれた先生がいました。その先生のおかげで立ち直れて、わたしもその先生みたいに、苦しんでいる子を救えるような教師になりたいって、夢も持てたの。それが、今教壇に立っている理由です」

※
愛も辛島先生を慕っていることを、優希は思い出した。

「ところが、先生になったら、学校現場はむしろわたしが学生だったころよりも、窮屈きゆうくつになっているように感じました。わたしの赤毛は先生としてふさわしくないから、髪を染めるように言われました」

⑩
生徒たちが、北側先生の方をちらちらと見た。北側先生はあごを引いた。

「わたしは新任だし、最初から目をつけられたくないって思っ……、ウィッグを、かぶった」

辛島先生は目線を教卓に落とす。

「でも、それじゃ、わたしは何のためにここに立っているか分からない。もう、そんなこと、やめます！」

辛島先生はそう宣言すると、声を張り上げた。

「だから、みんなも思っていることを素直すなおに言えはいい。同じじゃなくていいんです。さっきみたいに、賛成でも反対でも、自分の意見を自由に言うことが大事なの！」

辛島先生の叫びさけびのような声は、静まり返った教室を貫いた。

一拍置いてから、盛大な拍手と歓声かんせいが上がった。すぐそこに北側先生がいることを、みんな忘れていた。

「先生、アニーみたいで可愛いよ」

「そっちの方が全然いい」

⑪
優希はなぜか涙腺なみせんがゆるんで、視界がぼやけたまま、手を痛くなるくらい打ち続けた。

ドアのところ、ぼう然と立ち尽くしていた北側先生は、いつの間にかいなくなっていた。辛島先生は、ロングホームルームの運営をもう一度、優希と誠にバトンタッチした。

(佐藤いつ子『透明なルール』より)

- ※1 内申 ……成績のこと。
- ※2 椿中 ……優希たちの通う中学校。
- ※3 米倉さん ……優希のクラスメイトである、不登校ぎみの転校生。米倉愛。
- ※4 ボブスタイル ……肩くらいまでの長さで切りそろえられた髪型。
- ※5 愛 ……※3と同じ。

【B】

大学一年生の基礎ゼミ(少人数クラスのホームルームのようなもの)を担当し、最初の講義で自己紹介してもらうと、必ずこんな発言が聞こえてきます。「話しかけてもらったら何でもしやべるんで、遠慮なく話しかけてください」。つまり、自分から話しかけにいくと相手に「迷惑をかける」かもしれない。でも私自身は「話しかけることは迷惑ではない」ので、あなたから「話しかけてほしい」と、「他人は私に迷惑をかけてもいいよ」と伝える発言です。

大学一年生なんてみんな知らない人同士なんだから、気軽に話しかけたらいいじゃない。⑩ 以前はそう思っていました。でも、中学高校で培われた「他人に迷惑をかけてはならない」を X として内面化してきたのなら、この一線を越える事は、「憲法違反」になります。とはいえ、友だちはほしいし、一人だと淋しい。すると、「話しかけてくれたら喜んで応じる」という受け身姿勢で「他人が迷惑をかけてもいいよ」と宣言すること

とによつて、「憲法違反」にならずに、友だちを増やそうとするのです。

これは、高等な「空気を読む」戦略の一つかも知れません。「迷惑をかけるな憲法」という不文律を共有しているからこそ、その「書かれざるゲームのルール」空気を讀んだ上で、そのルールの範囲内で友だちを作りたい、という姿勢です。でも、そんな「空気」が作られるのは、その「書かれざるゲームのルール」空気を破つてはならない、という X が強いからです。そして、それを破る「空気の読めない人」を他者比較の中で突き止め、「からかい」や「いじめ」によつて教室から排除したり、その雰囲気ふんいきに馴染めず不登校へと追いでいく中で、より「同調性」が強まっています。

これは二〇二〇年のコロナ危機当初の「自粛警察」と共通すると思います。マスクをしていない人を糾弾する、他県ナンバーの車が停まっていると「他県ナンバーお断り」の張り紙をしたり、車を傷つけるなどの現象がありましたよね。(中略) 感染症への恐怖や基礎疾患を持つ人がマスク対策をする、というのはわかります。でも、それ以上に、「迷惑をかけるな憲法」に大学生だけでなく大人も強固に縛られていて、それを遵守できない人は罰しても良い、という「空気を読む」 X の風潮が「自粛警察」を産みだしたのではないかとすら思えるのです。

(竹端寛『ケアしケアされ、生きていく』より)

※6 不文律……互いに心の中で了解合っているきまり。

※7 糾弾……強く非難すること。

※8 遵守……決められたことに従うこと。

問一

——部③「開いた口が塞がらなかつた」、⑥「間髪を入れずに」、⑦「怪訝そうに」、⑧「声がうわずつた」の意味をそれぞれ選び、記号で答えなさい。

③「開いた口が塞がらなかつた」

ア 妙に納得してしまった

イ 悔しさで言い返せなかつた

ウ あきれてものも言えなかつた

エ 予想外で何も考えられなかつた

⑥「間髪を入れずに」

ア すぐに

イ 感情的に

ウ 不満そうに

エ 自分勝手に

⑦「怪訝そうに」

ア いらだつた様子で

イ 納得していない様子で

ウ 挑発する様子で

エ 興味を持った様子で

⑧「声がうわずつた」

ア 声がかれて聞こえにくくなつた

イ 声が豊かに響くようになった

ウ 声の調子が高くなって乱れた

エ 声が低くなって静かになつた

問二——部①「オブザーバーに徹^とするよう」にはどうか、文末が「——いること」となるように、本文中の辛島先生の様子から十二字で抜き出して答えなさい。なお、句読点を含める場合は一字に数える。

問三——部②「優希の問いかけに、クラスみんなは目をそらすように、机の上を見たり首をひねったりしている」とあるが、その理由として、もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 自ら発言して周りから浮きたくないから。
- イ みんなが賛同する意見を考えているから。
- ウ クラスを仕切る優希を快く思っていないから。
- エ すでに案が出ていることに満足しているから。

問四——部④「『透明^{とろみ}なルール』の見えないロープ」とは何を表しているか、もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 仲間で団結し、周りからなにかを言われても決してゆるがない決め事。
- イ クラスの友達など、特定のグループの中でしか通じないルール。
- ウ 学校の決まり事など、みんなが平等に従わなくてはならないもの。
- エ 誰に言われるでもなく、自分から周りに合わせて言動を制限するもの。

問五——部⑤「ここで区切った」とあるが、このときの優希の様子として、明らかに間違っているものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア これから意見を言う決意を固めようとしている。

イ 緊張によつて言うべき内容を忘れてしまっている。

ウ 初めから反対して不快感を与えないようにしている。

エ 反対意見を言うことに対して不安を感じている。

問六——部⑨「冷たかった優希の指先が、じんじんしてきた」とあるが、このときの優希の思いとして、もっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分のために勇気をふりしぼってくれた友だちを目にして、感動するとともに、責任感を抱きはじめている。

イ 自分の意見がみんなに受け入れられ、よろこびを感じている反面、なにか嫌な予感におそわれている。

ウ これまでにはなかった意見の多さに圧倒され、不安を感じている場合ではないと、焦りはじめている。

エ 自分の思いが認められるか不安だったが、活発な話し合いにつながり、よろこびと手ごたえを感じている。

問七——部⑩「身を硬くしたまま、じつとしている」とあるが、その理由として、もっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分たちの意思が芽生え、緊張しつつも理不尽な要求に抵抗しようとしているから。
- イ 全員で協力しなかったことを後悔し、味方のいない優希を助けようとしているから。
- ウ 長く続いているクラスの話し合いに疲れてしまい、立ち上がる気力すらなかったから。
- エ じつと話を聞いていないと、野球部は罰として早朝ランニングをさせられるから。

問八——部⑪「生徒たちが、北側先生の方をちらちらと見た」とあるが、その理由として、もっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 正論を言われ立場の弱くなった北側先生を冷やかすため。
- イ 北側先生がどんな反応をするのか様子をうかがっているから。
- ウ 辛島先生のカミングアウトに対して何か発言を求めているから。
- エ 自分たちも厳しい校則をゆるくしてほしいとアピールするため。

問九——部⑫「優希はなぜか涙腺なみだせきがゆるんで、視界がぼやけたまま、手を痛くなるくらい打ち続けた」とあるが、その理由として、もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 辛島先生のおかげでクラスの意見が今まで以上に活発になり、そのことに対して安心したから。

イ 恐ろしい北側先生を言い負かしたことで、クラスの団結力が増したことを祝福しているから。

ウ 自分の思いに共感してもらえたような嬉しさに加え、辛島先生の勇気ある行動に心を打たれたから。

エ 辛島先生の話に強く感動した一方で、自分のふがいなさに悔しさをかくしきれずにいるから。

問十——部⑬「以前はそう思っていました」とあるが、筆者は現在どのように思っていると考えられるか、もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 気軽に話しかけるのではなく、他人に迷惑をかけないよう礼儀れいぎをもつて話しかければよい。

イ 人間だれしも迷惑をかけるのだから、お互いに許し合って気軽な気持ちで友達を作ればよい。

ウ 他人に迷惑をかけることを意識しているため、自分から気軽に話しかけられないのも無理はない。

エ 他人に迷惑をかけまいとする気持ちを乗り越え、友達を増やそうとする積極性を身につけるべきだ。

問十一【B】の文章内にある X に共通して当てはまる言葉を、【A】の文章内から漢字四字で抜き出しなさい。

問十二 【A】と【B】の文章を読んだAとEの五人の中学生が、話し合っている。次の発言の中で、文章の内容の読み取りが、あきらかに間違っているものを一つ選び、記号で答えなさい。

中学生A 【A】の文章で、最初はクラスのみんなからの発言がなかったよね。意見がないということよりも、言いたくても言えなかったということはありそうだよね。

中学生B そう思うよ。なぜなら、優希が自分の思いをみんなの前で述べた後、クラスの人たちが次々と自分の意見を言うようになった様子が書かれていたからね。

中学生C でも、人と違った発言をするって、とても勇気があることだよ。辛島先生も「人と違う」髪の毛のせいで、昔いじめられていたと言っていたものね。

中学生D 【B】の文章には、大学生や大人でも「空気を読む」といった、周りに合わせた行動をしてしまうと書いてあるくらいだから、難しいこともあると思うけど、「人と違う」からといって、排除はいじょしていい理由にはならないことは、理解しておく必要があるね。

中学生E 【B】の文章では、そういった周りに合わせる行動が、社会問題にも発展してしまっているから、一人一人が意見を発信することが大切であるという結論が述べられているね。

二 次の詩を読んで後の問いに答えなさい。

私は見ているのだった

電車の窓から 遠いところを

冬枯れの 田んぼの

ひろびろとつづく むこうの

遠い空の下

少しかすんで見える

雑木林の細い線

私の目は 細い梢こすえに止まって

地の呼吸を聞いている

陽のささやきを聞いている

毎日近いものばかり見ている

（ ）が

まだ冬のコートの中にいる

私をおいて

遠い梢に 春を聞いている

問一 空欄（ ）にはいる適語を文中から三字で抜き出し答えなさい。

問二 詩の鑑賞文としてもつともふさわしいものを次から選り記号で答えなさい。

- ア 雑木林のなかを吹きぬける風の様子に、冬の訪れをしみじみと感じている。
- イ 明るく穏やかな太陽の光に、春のうらかな気分をのんびりと感じている。
- ウ 遠くに見える雑木林に、かすかにただよう春の気配をいちはやく感じている。
- エ 厚いコートを見にまとも、なお寒い冬に厳しさをひしひしと感じている。

三 次の短歌と俳句を読んで後の問いに答えなさい。

A 列車にて遠く見ている向日葵は少年のふる帽子のごとし

寺山修司

B こんなよい月を一人で見て寝る

尾崎放哉

問一 Aの短歌で使われている表現技法を次からひとつ選り記号で答えなさい。

- ア 倒置法
- イ 体言止め
- ウ 反復法
- エ 比喩法

問二

Aの短歌の解釈としてもっともふさわしいものを次から選び記号で答えなさい。

ア 向日葵から見た列車の中の少年は、こちらに向かって帽子を振っているように見えるようだ。

イ 向日葵が咲いているこの広い土地から見える列車は、たくさんの少年が乗っているようだ。

ウ 列車から窓の外を見ていたら、かぶっていた帽子が飛んで向日葵に引つかかってしまったようだ。

エ 列車の窓から遠くに咲いている向日葵が見えるが、まるで少年が振っている帽子のようだ。

問三

Bの俳句の句意としてもっともふさわしいものを次から選び記号で答えなさい。

ア こんなに心を打つ美しい月が今日も出ている。いつもながら、一人で楽しく眠れることだ。

イ とても美しい月が出ている。しかし、それをいっしょに見る人もなくさみしく感じることだ。

ウ こんなよい月を見たのは、一人で毎日月を眺めていたおかげだ。この日に感謝して寝よう。

エ 美しく輝く月が現れたが、もうその月には魅力を感じない。すべてを忘れ一人で寝ていたい。

【四】 次の文章を読み後の問いに答えなさい。

【一九一三年、三十八歳のシユバイツァーは、妻のヘレーネとともに、フランス領赤道アフリカのランバレーネへおもむいて、病院を建てた。そして、あらゆる不自由を忍び、すさまじい自然と戦いながら、^①黒人の救済に全力を傾けた。】

彼の事業は、^②しだいにヨーロッパの人々に認められて、援助者も多くなり、医者や看護婦も、彼を助けるためにやって来た。彼は、ときどきヨーロッパへ帰って、講演をして援助を求めたり、演奏会をして資金を集めたりしたが、やがてアフリカへ渡って、黒人の治療と病院の仕事に専念した。病院はだんだん拡張され、彼の偉大な事業は、全世界の人々に大きな感動を与えた。

一九五三年、七十八歳のとき、シユバイツァーはノーベル平和賞をおくられた。初めてのアフリカへ渡ってから五十余年、一九六五年に亡くなるまで、彼は病院の事業と学問の研究に努力を続けてきた。() 彼はいそがしい仕事のかたわら、多くのすぐれた著書を書き、りっぱな業績(成果)を示したのである。

問一 —— 部①「黒人の救済」とは何を意味しますか。もつともふさわしいものを次より選り記号で答えなさい。

ア 住む場所を確保すること。

イ 食べ物を提供すること。

ウ 病気を治すこと。

エ 音楽を教えること。

問二 ――部②「しだいに」はどこにかかっていますか。正・し・い・も・の・を・次・か・ら・一・つ・選・び・記・号・で・答・え・な・さ・い。

ア 認められて イ 多くなり ウ 助けるために エ やって来た

問三 文中の（ ）に入るのに正しい語を次から一つ選び記号で答えなさい。

ア とくに イ さらに ウ つまり エ だから

問四 【一九二三〇年全力を傾けた。】の部分は、文章を強く印象づけるため、どのような方法をとっていますか。もつとももふさわしいものを次から選び記号で答えなさい。

ア 前半で妻の建築家としての実績を表現している。

イ 文章全体を通して同じ言葉を繰り返し表現している。

ウ 反対の意味の言葉を適度に並べて表現をしている。

エ 後半で彼の人柄がわかるような表現をしている。

問五 この伝記文はどのような書き方をしていますか。もつとももふさわしいものを次から選び記号で答えなさい。

ア 時代的な背景を中心としている。

イ 周囲の行動をくわしく述べている。

ウ 業績をおおざっぱにまとめている。

エ 青年時代の生活環境を述べている。

五

次の各文は、中学生が調べる研究・報告文について、それぞれの調査に当たっての確認事項です。①から③の（ ）に当てはまるものもふさわしいものを後からそれぞれ一つずつ選び記号で答えなさい。

- ・まず調査するに当たって、きっかけや目的を、常に忘れないように心がけること。
- ・正確な知識を得るために、注意深く物事を（①）すること。
- ・物事を正確かつこまめに（②）するためにメモをとること。
- ・常に調査に対しては（③）を持ってよく考えること。

- | | | | | | | | | |
|---|---|----|---|----|---|----|---|----|
| ① | ア | 観察 | イ | 分配 | ウ | 応用 | エ | 売買 |
| ② | ア | 創造 | イ | 記録 | ウ | 接続 | エ | 否定 |
| ③ | ア | 疑問 | イ | 自信 | ウ | 礼儀 | エ | 武器 |

六

次の①・②の——部の意味としてもっともふさわしいことわざや慣用句を、後からそれぞれ一つずつ選び記号で答えなさい。(同じ記号は二度使用しないこと)

- ① 表向きのことばかり話していないで、お互い本当のことを言おうじゃないか。
- ② 最後の大会でキャプテンがメンバーに呼び掛けたひと言を心に刻み忘れるな。

ア 馬の耳に念仏

イ 油断大敵

ウ 肝きもに銘ずる

エ 腹をさぐる

オ 腹を切る

カ 腹を割る

キ 言葉をにごす

ク 口車くぐるまに乗る

ケ 二枚舌じた

コ 亀の甲より年の功

サ 尾ひれをつける

シ 骨折り損づえのくたびれもうけ

七

次の——部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 正しく生きるシセイを大事にする。
- ② タボウな兄に勉強を教えてもらうのをやめる。
- ③ 自然破壊について自分のシュチョウを友人に伝える。
- ④ これから学校生活を過ごすテビキが記されている。
- ⑤ 有言不実行の弱点をコクフクする。

八

次の——部の漢字の読みを書きなさい。

- ① ようやく行われた裁判を傍聴する。
- ② この団の大将には全幅の信頼を寄せている。
- ③ 相手を選ばず立ち向かう度胸がある。
- ④ 熊に気づかれないようにじつと潜む。
- ⑤ 勝利のために全員が奮い立つ。

